

氏 名	かね だ ち あき 金 田 千 明
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	論 文 博 第 456 号
学位授与の日付	平 成 15 年 11 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	カントの《ästhetisch》概念の「両義性」 ——『判断力批判』の読者論のために——

論文調査委員 (主 査) 教 授 岩 城 見 一 教 授 伊 藤 邦 武 助 教 授 福 谷 茂

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、カント研究に長年携わり、これまでも注目すべき論文を公にしてきた論者の、『判断力批判』（以下、「第三批判」）の解釈に関する、400字詰め原稿用紙にして1,200枚を超える、きわめて厳密な研究の成果である。本論で目指されるのは、「第三批判」に頻出する《ästhetisch》概念の理解についての批判的研究であり、この意図は、すでにタイトルにおいて、括弧で括られた「両義性」と、副題の「読者論」によって示されている。

我国の翻訳書、およびそれに基づくカント研究においては、『純粹理性批判』（以下「第一批判」）の冒頭の節のタイトル、《Ästhetik》は「感性論」、およびそこに出てくる《ästhetisch》は「感性的」と正当に訳され、理解されているが、「第三批判」における《Ästhetik》は「美学」、また《ästhetisch》はある箇所では「感性的」、別の箇所では「美的」、甚だしくは「美学的」とも訳され、通用してきた。つまり第三批判におけるこの概念は、「両義性」をもつものと解されてきた。論者は、ドイツ語が日本で翻訳されることで、この概念の「両義性」が「訳し分け」によって露になったことに注目する。西欧では、《ästhetisch》はそのまま《aesthetic》や《esthétique》に置きかえられるため、この語の「両義性」が顕在化しないまま今日に至っているからである。論者の指摘のように、この場合重要なのは、日本人のカント理解の特殊性ではない。むしろ、注目しなければならないのは、この語が日本語に翻訳されるときに、すでにこの概念を両義的なものとみなす理解の枠組が19世紀以後、西欧で自明となっており、そのような研究を学んだがゆえに、近代の日本人は概念の「両義性」を二つの訳語を当てること示そうとした、という点である。それゆえ論者はこの「両義性」という理解が、どのようなカント読解の枠組の中で生じ、また我々のカント理解をも方向づけるようになったか、このことをたどり、またカントのテキストに即して読解を進めたとき、「両義性」という理解が維持しうるか否かを問う。両義性に括弧が付され、副題が「読者論」とされたのはこのためである（緒言）。

本論文は「導入」と上の「緒言」に続く、6つの章からなる。

第一章で論者は、《ästhetisch》概念が「両義的」とみなされる論理構造を解き明かす。このような理解（誤解）が今日まで続いていることには、それなりの論理的理由があるからである。この点で論者の議論の進め方は、「第一批判」でカント自身が行なった、「誤謬推理」の構造の解明による、従来の哲学的先入観の批判という方法を導入したものといえる。論者はまず「第三批判」の第1節を細かく分析し、カントが「判断がästhetischである」と言うときに意味されているのは、「判断が限定根拠において主観的以外にありえないこと」、「判断において表象が主観の快・不快の感情という限定根拠に関係づけられていること」、「判断の限定根拠のなかに客観の概念が含まれていないこと」、この三点であることを確認する。ところで論者は、同じ《ästhetisch》概念が、「快・不快」とはまったく関りのない意味で用いられている箇所もあることを、第17、26節を分析することで取り出す。こうしてこの概念は、最初の分析からすれば「美的」、第二の分析から「感性的」を意味する、「両義的なもの」と解されてしまう理由（テキストの「仕掛け」）が明らかにされる。

この概念が「感性的」と解されるのは、「第一批判」にその用例があることにもよるが、さらに重要なのは、この概念が

「美的」と解される理由である。論者は、第三批判においてこの概念が237回使用され、そのうち《das ästhetische Urteil》が75回見出せること、しかも後者においては、この概念はすべて最初の分析が明らかにしたような意味で用いられ、それゆえ「美的」という意味をもちうることを指摘する。論者はここに、《ästhetisch》概念が両義的とみなされるようになる論理的根拠を見る。論者によれば、この概念は、一方で「感性的」としか解されない箇所があると共に、この概念が「判断」と結び付けられることで、「美的」をも意味しうるものとなる。このために、「判断」を除いて単独に用いられる場合でも、それが「美的」という意味で理解されることが自明になってしまった。また、このような単独の概念の理解から合成概念の理解に進むのみでなく、それと逆向きの理解の結果、この概念は「美的」という意味で理解され、またそれが「判断」と合成されることで「美的判断」という用語ができたという理解もまた自明となった。そこでは「結論を先取りするトートロジー」が生じ、しかもそれに気づかれないままこの概念は「両義的」だという理解が自明となり、強い理解の枠組（「読者の幻想」）を形成するのである。

第二章で論者は、このような理解が19世紀後半に定着したことを、心理学者T・フェヒナーとカント学者H・ファイヒンゲルのテキストからあとづける。19世紀の理解が注目されるのは、それが今日のカント理解（誤解）をも規定しているからである。論者はフェヒナーがカントの第三批判に見出せる《Ästhetik》を「美学」、また《ästhetisch》も「感性的」よりもむしろ「美的」と解する傾向にあったことをあとづけ、また当時の辞書の検討を通して、この概念は一方で「美的」、他方で「感性的」という意味を持たされていたことを確認する。次いで論者は、19世紀後半から20世紀にかけてのカント学者ファイヒンゲルのこの概念についての理解の詳細な検討を行ない、彼が第一批判の《Ästhetik》を「感性論」と解し、第三批判ではそれを「美学」と解したこと、それと同様に、《ästhetisch》も「両義的なもの」とみなしていた可能性が高いこと、ファイヒンゲルはこの両義性を、バウムガルテン的な意味とカント的な意味との両義性（「併用」）と解していたことを指摘する。論者はこのようなファイヒンゲルのカント理解はすべて「錯誤」だとみなす。この「錯誤」にその後のカント理解は依存してきたことになる。それゆえこの錯誤の除去こそが、現代のカント理解のための鍵になる。

第三章において、論者によるカントの第三批判におけるこの概念の綿密な吟味がなされ、その「両義性」という理解の「錯誤」が論証される。本章こそ、論者が最も力を注いだ章であり、他の章に比して量的にも多くの頁が割かれている。

論者がまず取り上げ分析するのは、カント自身がこの概念を仔細に分析した、第三批判第一序論である。これは、この書が公刊の際に、より短い第二序論に変えられ、「破棄」された。しかし論者は、第一序論の内容をカントは無効とみなしたのではなく、弟子ベックによって「摘要」のかたちで公にされることを望んでいたことを明らかにする。しかもベックはカントのこの序論のうち重要な箇所を省いたものを公にし、本来の序文は19世紀末に見出されるまで死蔵されていた。これが「両義性」という理解の大きな原因となった。19世紀に序論は「不在」だったのであり、そこには、この序論の意義への「無知」ゆえの「不在」とともに、ベックによる削除ゆえの「不在」という事態が生じていたこと、このことを論者は、当時のカントの著作の出版事情をあとづけつつ明らかにしている。これに対して論者は、この第一序論を分析し、カントが《ästhetisch》を一貫して「感性的」という意味で用いていたこと、さらにこの概念が「判断」と結びついたときに、「感性的」であるとともに「美的」という意味を帯びることを論証する。しかも論者は、このような把握が、1783年と推定されるカントの「ムロンゴビウス形而上学講義」に見出せることをつきとめる。このような文献学的研究の結果、論者は、この概念は、互いに相容れない意味の並立というかたちで「両義的」なのではなく、まず「感性的」という意味を有し、次いで「判断」の形容詞となるとときに、同時に「美的」という意味を持ちうる概念であることを論証する。したがって、《das ästhetische Urteil》は、従来考えられてきたような「合成語」ではなく、それ自体特有の意味をもつ、「カント美学のアトム（分割不可能者）」とみなされる。同時に論者はこの序論に出てくる《Ästhetik》もすべて「感性論」であることを論証する。論者の解釈は、従来のほとんどのカント解釈が変更を余儀なくされるほどの、きわめて重要なものと言わなければならない。近・現代日本のカント理解が、19世紀のカント理解の枠組で動いてきたことも改めて示されている。

さらに論者はこの解釈の妥当性を確かめるべく、第三批判におけるすべての《ästhetisch》概念を検討し、それを「記号論」的視点を導入することで整理し、この概念が「感性的」のみ意味する場合（「第一語用」）と「美的」という意味も併せ持つ場合（「第二語用」）に分類し表にしている（前者56箇所、後者172箇所、推定後者5箇所、決定不能3箇所 除外1箇所）。この入念な分析により、きわめて明晰な第三批判読解の道が開かれることになる。実際論者はこの新しい解釈に則っ

た第三批判の日本語訳を行ない、その一部はすでに公にされている。

第4章において、第3章で得られた結論に基づき、19世紀以来の《ästhetisch》概念の理解を幾つかの「命題」として呈示し、それに対する「反対命題」を呈示することで、この概念の誤読の諸相が明らかにされる。この試みによって、どのような読みが正当であるかが、明確に理解可能になる。ここでも、この概念が「両義的」という理解に対し、基本的にそれは「感性的」を意味し、それが「判断」と結合することで、「派生的に」「美的」という理解が開かれることが示され、また「美的判断」は「美的」と「判断」との「加法」的合成ではなく、この結合において、この概念が新たに「美的」意味をも帯び、性質を変えることから、この結合は「乗法的」であることが改めて指摘される。論者によれば、本来「乗法的意味」であったものが「加法的意味」に理解された、この「誤認」こそが、この概念の「両義性」という「仮象」の生みの親である。また歴史的にも、19世紀以来20世紀に入っても、この概念を「美的」と解す先駆者としてカントが理解されていたことがあとづけられる。このような現代的理解がカント理解に「投影」されることで、19世紀以来のこの概念を「両義的」とみなす枠組は強化されてきたことが確認される。

第5章では、論者はカント以前とカントの同時代の思想における《ästhetisch》概念の理解を検討する。19世紀の理解は突然生まれたのではなく、それ以前の理解が何らかのかたちで継承されて一般化した可能性が推定されるからである。この推定から、論者は、1730年から60年に出てくる、A・G・バウムガルテンとその同調者、G・F・マイアーのこの概念への理解、同時代人としては、カントが尊敬したJ・G・ズルツァー、カントの終生の論敵、J・A・エーベルハルトの理解、第6章では、カント直後の思想としては、F・シラーと、G・S・A・メリンが取り上げられる。これらの思想家の著作が、年代順に並べられ、そこにカントの年表が添えられることで、関係が明瞭に理解できるよう配慮されている。

バウムガルテン派の特徴は、《aesthetica》は本来「感性論」であるが、美を基準に感性論を展開する点で、「感性的」と「美的」とは、前者が後者にしたがって、しかも「料理学」の「味覚」と「美味しい」との類比関係、そして論理学の「真理」と「悟性」との類比関係を持ち出しつつ考察されるという点で、「被統制／統制」の関係（「目的論的」関係）にあることが解明される。ここでもマイアーの《ästhetisch》概念が逐一吟味され、その表が作成されている。

論者によれば、このような関係は、70年代前半に失われ、かの概念の「単義化」と「記号化」が生じる。つまりこの概念が、「感性的」という意味を失い、「美的」という単一の意味で使用されるようになる、「美学的言説システムの成立」である。これに対して《Ästhetik》は「感性論」と「美学」の二重の意味で使用されていたことも指摘され、カントの同時代に、この概念の意味自体がそれ以上問われない事態（「ブラックボックス」の状態）が生じていたことが明らかにされる。それを端的に示すのがズルツァーである。論者はズルツァーの理論を詳細に検討し、そこに、美的対象とそれに関する主体の本質特徴を、心理学的に「主観／客観」関係から捉えようとする新しい傾向が見出せること、またズルツァーにおいて件の《ästhetisch》概念が、すべて「美的」という意味で語られていることを確認する。ここでも論者は、この概念の用例すべてを挙げて周到に吟味することで、単義的な言葉としての《ästhetisch》の発明者がズルツァーであろうという結論をえる。まさにカントの同時代に、かの概念を「美的」とみなす言説がはじまっており、また「美学」と「感性論」という二つの呼称（「両義性」）が同じ言葉に読みこまれることも一般化していたわけである。論者の、ズルツァーの理論に関する綿密な検討も、美学史的に重要な成果である。

次いで論者はカントの論敵エーベルハルトの理論を年代順に検討し、カントとは異なる仕方での理論家が19世紀に18世紀美学を伝えた役割を解明する。論者によれば、エーベルハルトはカントに先んじる思想を、天才論で展開していたが、カントを批判し、自らバウムガルテン派の立場を守るために、この新しい側面（「主観主義」）を撤回し、「復古」的になった。論者はこの思想家の変化とその特色を、年度の変わるテキストの細かな検討によって描き出す。そこでも、《ästhetisch》概念のすべての使用例が検討され、そこからエーベルハルトのバウムガルテン派マイアーへの依拠が明らかにされる。しかしまた同時に、論者は、エーベルハルトが、バウムガルテン美学の継承を、「修正」というかたちで試みた結果、最終的にこの伝統美学の幕引きの役割を果たすことも明らかにする。それはエーベルハルトが芸術的真理を論理学における真理との関係で理解しながら、しかし芸術作品の特殊構造を主題にし、芸術的真理の固有性を守る方向へと向かったからである。このことによって、バウムガルテン派の美学は、特殊な真理を擁護する美学へと読みかえられてしまう。論者はそれを「夢—幻想の美学」と呼んでいる。それは、作品や美を最早既成の「真理」に還元しない、19世紀的近代美学と繋がることに

なる。バウムガルテン派の美学は、「修正」されることで、「実質的な」意味では、カント以上に、19世紀以降の美学に継承され展開されたとする論者の指摘は、啓発的である。

最終第6章において、論者はカント直後の、カント理解者シラーの『美的教育論』を取り上げる。ここでも《ästhetisch》概念の用例すべてが検討される。それによって、シラーにおいてこの概念は、カントおよびカント周辺の思想家から多様に受容され、しかも、この概念を用いたすべての合成語は「カント的意味」をもつとされ、またこの概念がシラーによって「統一的に」、「美的」意味で理解されていたことが論証される。カント哲学を後ろ盾にして、この概念を統一的に「美的」と解する枠組が、流行作家シラーによって強められ、また、この概念に含まれる「感性的」という意味も考慮されるがゆえに、この概念の「両義性」への理解の枠組が決定的になった。これが論者のこの章の結論である。実際、19世紀シラー以後の美学は、そのみかロマン主義の哲学全体が、美と芸術を中心とする理論へと向かい、「美的なもの」が中心概念になり、また「芸術」が「真理」媒介機能をもったものとして前景化する。その出発点にシラーのカント理解（誤解）があったわけである。

以上たどったように本論文は、カント第三批判における《ästhetisch》概念に的を絞り、それを「両義的」とみなす、現代にまでおよぶ理解の枠組がどのような論理構造をもち、またどのようなかたちで歴史的に形成され自明なものとなったかを検証し、それとともに、このような理解の枠組の「仮象」性（錯誤）を、綿密なテキストの検討を通して示し、それに代わる読みを呈示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、カント『判断力批判』（以下「第三批判」）における《ästhetisch》概念の理解（読み）についての批判的研究である。我国では、『純粹理性批判』（以下「第一批判」）の《Ästhetik》は「感性論」、また《ästhetisch》は「感性的」と訳され、理解されているが、「第三批判」の《Ästhetik》は「美学」、また《ästhetisch》はある箇所では「感性的」、別の箇所では「美的」、甚だしくは「美学的」とも訳されてきた。論者は、この〈訳し分け〉により、この概念の「両義性」が露になったことに注目する。西欧では、《ästhetisch》はそのまま《aesthetic》や《esthétique》に置き換えられ、この語の「両義性」が顕在化しないからである。この場合重要なのは、日本人のカント理解の特殊性ではない。むしろ注目すべきは、すでにこの概念を両義的とみなす枠組（以下「両義性理解」）が19世紀以後、西欧で自明となり、その受容により、日本人は概念の「両義性」を二つの訳語をあてることで示そうとした、という点である。タイトルの「両義性」に括弧が付され、副題が「読者論」とされたのはこのためである。

第一章で論者は、《ästhetisch》概念が、「両義性」理解を誘う論理的「仕掛け」が第三批判自体のうちにあることを、テキストの主たる箇所（第1、17、26節）を細かく分析して明らかにする。周到な配慮である。

第二章で論者は、両義性理解が19世紀後半に定着したことを、心理学者T・フェヒナーとカント学者H・ファイヒンゲルのテキストを詳細に分析してあとづける。しかも論者によれば、後世のカント理解を方向づけたファイヒンゲルの両義性理解は「錯誤」である。それゆえこの錯誤の除去が、現代のカント研究の、焦眉の課題となる。

第三章において、「第三批判」におけるこの概念が精密に分析され、「両義性」理解の「錯誤」が論証される。本章は、この論文の最も重要な成果を示す章である。

論者がまず注目するのは「第一序論」である。これは、テキスト公刊の際に、より短い序論に変えられた。しかし、カントは第一序論の公表を望み、しかもこれはベックにより重要箇所を省いて公にされ、本来の序文は19世紀末に見出されるまで死蔵されていた。論者はこの第一序論を分析し、カントが《ästhetisch》を一貫して「感性的」という意味で用い、それが「判断」と結びつくことで「美的」という意味も帯びることを論証する。カントが1783年頃にこのような理解に至っていたことも文献的に実証され、同時に序論に出る《Ästhetik》もすべて「感性論」であることが論証される。さらに論者は、第三批判のすべての《ästhetisch》概念を検討し、それが「感性的」という意味しかもたない場合と、「美的」という意味も併せ持つ場合とに分類し表にした。この入念な解説により、第三批判の正当な読解の道がはじめて開かれた。

第4章で論者は、両義性理解の主張（「命題」）と自らの読み（「反対命題」）との対照表を作り、「錯誤」の構造とその浸透の歴史とを明確に描き出している。

第5章では、カント前後の《ästhetisch》概念の理解があとづけられる。特にズルツァーから、かの概念を「美的」とみなす言説がはじまり、《Ästhetik》が「美学」と「感性論」という二つの意味で理解されたこと、またカントの論敵、エーベルハルトにより、バウムガルテン派の美学が「実質的な」意味でカント以上に19世紀以降の美学に継承されたことが示される。この指摘は美学史的に重要である。

第6章において、シラーの『美的教育論』で、《ästhetisch》概念を用いたすべての合成語が「統一的に」、「美的」意味で理解されていることが論証され、カント哲学を後ろ盾にする流行作家シラーにより、両義性理解が流布したことがあとづけられる。

以上のように本論文は、カント第三批判の《ästhetisch》概念に的を絞り、それを「両義的」とみなす、現代におよぶ論理構造を解明し、また「両義性理解」が歴史的に自明になる過程を検証し、それとともに、このような理解の枠組の「仮象」性（錯誤）を、テキストの厳密な検討を通して示し、それに代わる読みを呈示した。この試みにより、従来のカント研究の問題点が明確にされ、今後のカント理解への道が開かれた。また《ästhetisch》概念の変容を詳細にたどったこの研究は、18世紀中期から20世紀初頭にかけての美学史研究としても、貴重な研究成果になっている。

シラー以後、「両義性」理解は、ドイツ・ロマン主義やヘーゲル、およびヘーゲル派の美学により、一層強い枠組となって美学に浸透する。この点には論者は言及していない。しかしこれは19、20世紀美学史研究者の課題であり、そのときにも、論者の提示したカント解釈は常に参照すべき文献になるであろう。また論者が件の概念に関する自己の解釈を明確にするために導入した、記号論的方法に対しては、より詳しい説明が必要となる。これは、この論文の意義をより明快にするための、調査委員からの助言である。この助言は、本論文公刊の為に有益であろう。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2003年9月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行なった結果、合格と認めた。